vol.12

文化人 末松謙澄

「精魂を傾けた大著『防長回天史』」

謙澄は明治30年代の後半になると、『防長回天史』（周防国と長門国を治めていた毛利藩の幕末から明治初期までの歴史書。小倉藩との戦争の資料も含む）の刊行に向けて本格的に取り組んでいた。しかし、明治37（1904）年２月、日露戦争がはじまり、特使として英国に派遣された。それはヨーロッパ諸国の世論を日本側に向けるための広報活動を行うことであった。ことに欧州における「黄禍論」を払拭するのに苦心した。その一環として、英文著書『昇天旭日』、『夏の夢・日本の面影』を出版。この２著はヨーロッパで好評であったという。やがて、日露講和条約が調印されると２年余りの活動を終えて帰国した。

ところが、明治42年10月、岳父伊藤博文がハルピン駅頭で暗殺されるという大事件が起き、謙澄の身辺は急に多忙になる。恩誼ある伊藤博文のため『伊藤公国葬余韻２巻』、『孝子伊藤公』、『藤公詩存』などの著書を出版した。

英国にわたり歴史編纂法を学んできた謙澄は、明治30年に公爵毛利家歴史編纂所総裁を引き受けて『防長回天史』の執筆を進めていたが、ようやく明治44（1911）年初版を脱稿した。ここに至るまでは稿本を関係者に見せて、意見を聞き、何度も修正を重ねていた。それは謙澄の編集方針が「評論的歴史ヨリモ寧ロ記録的歴史」（緒言）を重視したこと、さらに謙澄が長州藩と敵対した小倉藩の出身者であったことなどが原因で、一時中断したこともあった。だが、謙澄の粘り強い努力で、毛利家の許可を得て、最終的には自費、自力で刊行できるまでにした。それは全12巻、6,780ページの大著『修訂版・防長回天史』の完成原稿だった（謙澄の没後、子息の春彦によって刊行）。歴史学者の一坂太郎氏は「末松謙澄による歴史書の多くが、今日に至るまで普遍的な価値を持ち続けている」と、高く評価している。

謙澄はその刊行をみる前に他界。大正９（1920）年10月５日、65歳だった。門司新報は同年10月８・９日と続けて「逝ける青萍（謙澄の号）子爵―多才多能の巨人」という大きな見出し記事で、謙澄の生前の功績を伝えている。

（文化人末松謙澄を考える会　城戸淳一）

▶『防長回天史』復刻・縮刷版（みなと新聞社 昭和42年）